

PHD LETTER

<16>

1985.9

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会
編集人：草地 賢一
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-2-3
甲南サンシティ元町ビル711 TEL.(078)351-4892
郵便振替：神戸1-29688財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定価：100円
レイアウト：エフアンドエフ

- 山岳民族と「開発」.....P.3
- 研修・フォローアップレポート.....P.4-5



ヒマラヤの山並みを望み田を鋤く。ネパール シンドウバルチョーク パラニバネ

ネパールでもタイでもフィリピンでも草の根の人達は家畜を大切にする
ここに雑草がある 人間は雑草を食べられないが
牝牛も牝牛も その人間の食べられない雑草を食べてくれる
それで 牝牛も牝牛も尿と糞を出してくれる
それは肥料になり土地を肥やし 穀物や野菜を育て 人間はそれを食べる
牝牛様は乳を出す 牝牛様は田を鋤き起こしてくれる
この牛を大切にしておれば 人間は永遠に生きていける
アジアの草の根にかえれば 日本も生きのびられる

南北問題の鍵・PHD運動

“世の中で一番尊いことは、人のために奉仕して役に立たないことではない”
(福沢諭吉)



PHD協会理事 多胡 尚祐

1909年岡山県津山市生まれ、東京大学医学部卒業。東大付属病院、姫路陸軍病院を経て、現在城南多胡病院院長。

職業を通じて社会に奉仕することを信条とするロータリークラブ。私は以前、この団体の例会で映画「世界の屋根のひげドクター」を観る機会を得ました。実は、それはもう10数年前のことなのですが、私はいまだにその時の感動を忘れることができません。内容は岩村昇博士夫妻がネパールの山また山の村々で、病める患者の診療に挺身されている姿の記録であります。シュバイツァー博士をしのばせるその崇高な姿に、同じ医師である私は思わず手を合わせたくなる思いがありました。幾山河を越え、行く先々の粗末な民家には、栄養失調で痩せ衰えた結核患者や天然痘患者の老若男女が両手を合わせて博士を迎えている。その姿、神々しいまでに輝いている博士の顔が、今もまぶたに焼きついてはなれません。かつて私がビルマ戦線で体験した悪夢、ペグ

ー山系、シャン高原の山河を越えて、篠突く雨を避けようとするやくだりついた竹の民家で私達を迎えてくれた者は、力尽きは横たわる友軍の哀れな屍でありました。余りにも相違する情景が重なりあって、一段とひげドクターのご苦勞と、何にもまさる尊い奉仕活動に深い感動を覚えたのであります。医療を志す者の畏敬の医人。東洋のシュバイツァー、岩村博士。それから数年後の1979年、私ははからずも国際ロータリー第268地区(兵庫県)ガバナーに選ばれました。ちょうど国際ロータリー創立75周年に当たる年であります。この記念行事の一つとして、国際ロータリーは“世界理解賞”を創設し、その第一号に岩村昇博士を選び世界大会において表彰したのであります。日本の誇りでありました。博士がこれを記念してPHD協会を創設されたことは、ご案内

の通りであります。私達の先輩は、欧米に学んで今日の素晴らしい日本を築きあげました。私達は、アジア、南太平洋の草の根の人達へ善意の奉仕をすることによって、ご恩返しをしなければなりません。そして“ともに生き、わかちあう社会”を生みだしたいものです。PHD協会が活動を始めて5年、皆様の尊い提金はすでに10名の研修生を生み、帰国した彼らは、それぞれフィリピン、ネパール、タイで草の根運動の輪を拡げております。協会もまた帰国後の彼らを指導協力することを忘れてはおりません。これが協会の特色であります。いわば何も無いところにキリスト教が生まれ、彼らを中心として文化の輪が広がりやがて祖国を覆うよう、これからもPHD協会にご支援を賜りますようお願いいたします。

長期事業

「人づくり」にご協力を

今、日本人の目はアフリカの飢餓救済活動に向けられています。その関心度も喜ばしいことにと、2、3年前のタイ、カンボディア難民の時に比べ、より高まっています。こうした注目が

もう一歩踏み込んで、飢餓の原因が必ずしも天災でなく、実は構造的な人災であると洞察できるまでに達する時、普遍的な国際協力が必要だという認識が日本にも生まれてくると思います。欧米には百年以上の歴史をもつ国際協力の団体が数多くあり、市民運動としても定着しているとも聞きます。長年の地道な調査や研究から生まれた情報も、市民の協力活動を有機的に展開させているのです。今日では、日本に

も少しずつそのような機関や団体が生まれていて、PHDもその一つです。しかし「物、金」の援助のみならず、PHDの主旨の一つ「人づくり」の協力事業は簡単なものではありません。長期にわたる計画的なプログラムが必要です。PHD協会では去る5月開催の評議員会、理事会で、今年度から「人材育成基金」を募集することが決定されました。目標額二億五千万円。ご協力をお願いします。

PHD協会総理事 草 地 賢 一

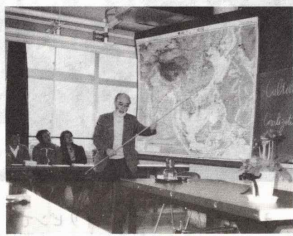
架 け 橋

フィリピンのPHD村づくりに参加してください。

PHD運動指導者 PHD協会理事 岩 村 昇

フィリピンの草の根の人達の中で暮らして今日でちょうど一週間を過ぎました。ルソン島ラグナ県イバト郡の村々に巡回しました。パナサレス君、リト君、ウイリー君、レネ君。4人のPHD運動リーダー達といっしょに、彼らから自分の村をPHD村にする。//”という

計画を手伝うために。4人とも、PHD研修生として日本で学んだことを活かして「養魚、養豚、みかん栽培、大豆栽培と加工を改良普及し、自分よりも貧しい隣人とわかち合せて、村から貧富の差を無くし「仲良く、健やかに、活き活きとしたPHD村にしよう。//”というのです。具体的にはまず、PHD養魚池、PHD養豚場、PHDみかん園、PHD大豆園と加工場をつくるために土地を探し、基金を集めるの



神戸市立本山中学にて

です。そして、いまだに4人のPHD運動のリーダー達がそれぞれ自分の土地の片隅で仕事し、自分の収入の10%を献げていたのを、村の共同事業・全体運動にしようというのです。パナサレス君、リト君、ウイリー君、レネ君からの伝言です。「フィリピンに来てください。私達の村に泊まってください。1日でも2日でもいい。村人に“生きる”とはわかちあうこと”を実践してみせてください。//”

Q.カレン族とはどのような人々ですか。
A. カレン族は、タイ、ビルマ、ラオス等にまたがって存在する山岳民族の一つです。タイ国内では主に、ビルマ国境に沿った北西部の山岳地帯に約50万人のカレン族が住んでいます。その多くはまだ未開の状態です。例えば、精霊信仰の世界に生き、定住することもなく「焼畑農業」を営みながら、文明とはほど遠い生活をしています。キリスト教やバプテスト派に属する私達の団体は、そうしたカレン族の人々の中に物心両面における改善をもたらすため、活動しています。

Q. 具体的にどのようなプログラムを実施しているのですか。
A. 私達の団体の目的の一つがキリスト教の布教にあることは言うまでもありませんが、同時に入信した人々の定着化とそれに伴う福



研修中のプリチャーさん(右)を訪ねたドンカム(左)・チャンチャイ(中央)氏(兵庫県栗東市)

作、野菜栽培等、定着農業の普及にも努めています。これには当然、灌漑設備の施設、田畑の開墾および土壌保全といったことも含まれています。いわば何も無いところにキリスト教に立脚した新しいコミュニティを作り出しているというわけです。また私達が今、最も力を注いでいる点は、教育の普及すなわち新しい知識・技術および社会の変化に柔軟に対応し、彼らが、彼ら自身の将来を築けるよう訓練することにあります。その上にこの学校では、農業・家畜の飼育・公衆衛生・病気予防の知識の普及といった実生活に結びつく教育にも熱を入れて進めています。実はプリチャーもそうした学校の一つで農業の先生をしていたのですが、若い世代の成長にカレン族の将来を期待している私達は、教育的な立場にある若者のリーダーとしての彼に、新しい農業技術・知識と共に大きな指導力自身をつけてほしいと願い、PHD研修生として送り出したわけです。プリチャーも子供の時は、親もとを離れ私達の運営する学校の寄宿舎で生活しながら学んできました。今、彼村ムシキーの学校で学んでいる子供達のうちから第2、第3のプリチャーが生まれ自分たちの村の発展に貢献してくれるものと期待しています。 総括的にいえば、キリスト教

山岳民族と「開発」

去る7月21日より4日間、プリチャーさんの送り出し団体であるタイ・カレン・バプテスト会議(T.K.B.C)の責任者トンカム・ソンサン牧師とチャンチャイ・クラバジョンさんが、アメリカでの会議の帰途、神戸に立ち寄られました。美万郡の研修現場を訪ねられた後、協会事務所にてT.K.B.Cが通める開発プログラムや現地状況についてお話を伺いました。

という精神的な基盤に立脚して、学校を中心とした教育を普及する中で具体的な生活改善の諸問題に地域社会=村人取り組んでいるということです。

Q. そうした生活改善への取り組みの中で難しい点はどういったところですか。
A. まず挙げるべき点は、教育が十分に

なされなかったために、特に年配の人々の間に新しい物の考え方、新しい技術に対する理解力、適応力あるいはそれらを受け入れようとする意欲が乏しいことです。キリスト教を受け入れ、私達と共に地域開発に参加している年配の人々の間においてすらこの傾向がみられます。ましてや、依然「精霊信仰」の中に生きている人々にとっては、生活改善は自らか信じてきたタブーを破る行為であり、自然の神々に逆らうことになるのです。しかし私達は彼らをそうした迷信の世界から解放することも重要な使命と考えています。実際、私達は今、一万人人くらいの人々と共通の信仰の下に働いていますが、その多くがプログラムの成果を自分の目で確かめ、キリスト教を受け入れた人々です。第2の点は交通・通信の便が極めて悪いことです。山岳民族の多くは、車ではなかなか入れないような地域で生活していますので、私達の具体的な、例えば医療奉仕といったプログラムも、計画的かつ継続的に進めるのが甚だ困難なのです。第3には、これが本質であろうと思われ



ムシキー村の学校で教壇に立つプリチャーさん

ますが、村の現状にあったあるいは必要性に立脚

した「開発」を、自分達にあったゆつくりしたペースを、どう確保してゆくのかを考へなければいけません。今、村の外、すなわちタイの社会で進められている開発とは、いわば標識も読まず、故障も直せない者が、車の運転技術だけを習ってやみくもに走りまわっているようなものです。この影響は政府の開発政策、外国援助といったものを通して、村々の生活にも確実におよびはじめています。ムシキーでも近年は、電気もガスもない状態の中で、ホシダのオートバイが走るようになりました。私達は自分の足もをしつかり見ながら、ゆつくり歩みたいと思っています。その意味で、プリチャーの学んでいる有機農業は、技術的にも思想的にもまさに今の村人のニーズに合致したものであることを知り、大変喜んでいます。

Q. プリチャーさんの希望では農業の生産性を上げ、より多くの現金収入を得、他の例えば教育・医療プログラムに貢献したいとのことでしたが、市場経済にあまりに依存しては逆にそれによる支配をうけ、村人の間に貧富の差を拡大し、結果的に私達が犯してきた同じ過ちを招かすことにはなりません。また、そうした商品作物の導入が政策としてうたわれた場合には、抵抗し得ないのでないでしょうか。

A. ご指摘の点、もっともだと思います。すでにそうした傾向は周辺の、特に山岳民族と平地のタイ商人との間に出はじめています。幸いに私達がプログラムを実施している村々では、まだ生活必需品は自給していますので完全に商品経済に巻き込まれているわけではありません。プリチャーの学んでいる有機農業法も現金獲得というより、当初は農業生産の向上による、村人の栄養状態改善に貢献し得るものと思います。しかし、すでに貨幣経済が一定程度浸透している現在、先に指摘され

た問題に私達も早晚、直面せざるを得ないでしょう。流通における協同組合も考えられますが、現在は私達教会が村人に均等に耕作面積を割り振り、協同作業をすることによって貧富の差が生じないように努めています。いずれにしても私達は、村人とともに、自分達のプログラムに時間をかけ、実施していくつもりです。

PHDサウンド〈8〉



シンボルマーク

「有機農産物共同購入会」のリーダー 松根敏子さんを自給センターに訪ねて

「地域で自給を！ 子供にすこやかな未来を！」というスローガンのもと、日本の食糧自給率を高めるため、地域で自給体制を築き生産者と消費者がいっしょになって“安全な食べもの”を作り育てていこうとするのが有機農産物共同購入会の目的である。

松根さんをこの運動に駆りたてた動機は、淡路島で奇形の子猿が生まれ母乳にまでPCBが検出されることを知り、母親として今、何をすべきかを考えたからであり、日本の食糧自給率が32%という歪んだ現実に危機感をいだいたからだという。

地元の生産者達と顔みしりの関係で、ともに安心できる食べものを作りたいとの願いから、49人の仲間がへそくりを出し合って2頭の乳牛と配送車を購入した。それを酪農家に委託し、成分無調整牛乳を自給することからはじめ、毎朝5時起きて配達にまわったことである。

以後、無農薬有機農産物、自然卵、無添加加工品、無公害日用品などの「良き生産者」を求めて着々と会の輪を広げ、85年現在、会員数1250世帯にまで成長した。

自給センターには豆腐工場も併設されており、

野菜や卵の集荷・配送・交流、そして学習の場として活気があふれている。

今、ここでPHD研修生のニールン・ガウチヤンさん(ネパール)が、松根恵さん(敏子さんのご主人)の指導で、天然のかりを凝固剤とした手作り豆腐に取り組んでいる。

同時に地元の農家(神戸市西区伊川谷)で有機農法をも研修中である。

ここでは、畑作農家の稲ワラや野菜くずを飼料に、家畜の糞尿を土にかえて堆肥に、と循環農業を行なっている。

有機農法とは、なんと簡潔でぬくもりのある理論であらう。

松根さんご夫妻が、研修生のホームステイならびに研修を引き受けてくださったきっかけは、昨年10月、兵庫県有機農業研究会で岩村博士の講演を聞き、自分達の会の目指すものがPHD運動のPeaceにも、Healthにも、Developmentにも通じると思ったか

らとのこと。ちなみにこの会のシンボルマークは、原爆の図で有名な丸木位里、俊、両先生の合作「鳩にいたかれた母子像」をいたされたという。

「今、私は食べものという手段で、すこやかな子供を育てる目的にむかって井戸を掘っています。でもある人は、アジアの貧困救済のための井戸を掘り、またある人は正しい教育のために、そしてまたある人は、人間の差別を除くために井戸を掘っているかもしれません。しかしこれらの井戸は、奥深いところまで、同じ水脈につながっていると思います。」

母親として、主婦として、また共同購入会のリーダーとしてのあらゆる体験が、彼女の中で有機的に結びついて、このような広い視野の考えをつくりあげ、実践につながったのであろう。もちろん、ご主人の大きな理解と協力はいうまでもないことである。



自給センターの仲間とガウチヤンさん(右端と中央が松根ご夫妻)

ヤングのコーナー

青春の胎動

「わかちあうこと」の芽ばえ

同中学では2年前に岩村博士の活動を記録した映画「世界の屋根のひげドクター」を観てPHDへの参加をはじめたそうす。映画に感動し、その気持ちを行動に結びつけようとして使用済切手回収運動が始まりました。さらに一円玉募金運動を実施したところ校内はもちろん、近所の方々からも協力があつたそうす。これらの活動を見守ってこられた小村先生は「最初は単に同情から

の協力のようにでしたが、序々にわかちあうことの必要を感じ、地球人としての自覚が生まれたのでした。活動に積極性がでてきました



次の活動への策を練る



この賑わいで近所の人々からも協力が

神戸市灘区国玉通1-1 神戸市立上野中学校 校長 吉村善男先生 生徒1107名

た。今後さらにこの意識を広げることができれば、卒業してから社会問題に高い関心を示す人間に育つでしょう。また一人、一人の将来に良い影響を与えてくれるだろうと期待しています。」と話してくださいました。同生徒会では半年に一度改選がありますが、PHD運動は引き継がれています。今はアルミ缶回収運動の作戦を練っているとのこと、その呼びかけ原稿の一部を紹介します。「アルミ缶を収集し再利用すれば資源浪費の歯止めになります。この運動も1円玉回収と同様に地道な活動ですが多くの人々を励ます力となるのです。ボランティア活動とは、一部の人間が行なうだけでは意味がないのです。一後略一、

「PHD運動を知ってから何か変わった?」「新聞やテレビのニュースで世界のできごとが気になるようになってきました。」上野中学生徒会のみんなどの話は、こんなふうにはじまりました。この学校では生徒会がまとめ役になってPHD運動に取り組んでいます。この日はちょうど学期末試験が終わった日でもあり、晴々とした表情の根津君、大塚君、小寺君、平野君、高田君の5人と顧問の小村先生にお話をききました。

ON THE WAY

緊張感漂うマニラ スラムに流入する最貧の人々

1985年2月2日午前5時、フィリピンに到着して最初に感じたことは、マルコスの大統領、アキノ氏のごとくでした。アメリカからまさに決死の思いで帰国したアキノ氏の、無念の死が現実になったこの空巷に今、僕も立っている。この緊張感にフィリピン滞在中、奥深いところまで、同じ水脈につながっていると思います。」

母親として、主婦として、また共同購入会のリーダーとしてのあらゆる体験が、彼女の中で有機的に結びついて、このような広い視野の考えをつくりあげ、実践につながったのであろう。もちろん、ご主人の大きな理解と協力はいうまでもないことである。

マニラ、スラム地区の街

なく流入している結果だという説明に頷きりと言明されていました。民衆のアキノ

氏への期待が、非常に大きく強いものであったことがその言葉のほしげさから感じとられました。特に村の窮乏よりは、年を追ってというより日を追って激しくなり、最貧の人々の生活を破壊させているようす。その原因の全てはマルコス大統領の病氣、経済政策のいきづまりからくるものすこいインフレだと思われました。

去る84年12月に一年間の研修を終えて帰国した研修生は、一年の間に物価が2倍以上にはね上がっていることに茫然失神の態度でした。

マニラのトンドにある東洋といわれるスラムを訪ねたときも、その規模の大きさに圧倒され、土地を捨てさせられた農民や網を捨てさせられた漁民が、途切れること

なく流入している結果だという説明に頷きりと言明されていました。民衆のアキノ



マニラ、スラム地区の街

アジアと息長いかわりを決意 帰国の途へ

ネパール、スリランカ、ビルマ、タイそして最後にフィリピンを訪問し、全ての国に共通しているの点をいくつか発見しました。第1にどの国でも国内または国境で紛争があり、最も苦しめられているのは農民をはじめとする最貧の人々であるという点。第2には、どの国においても政治や経済がほんのひとりにぎりの人達に握られており、それらの人々が住む都市は一見近代化されているものの、一歩外を離れ農村に入ると、農民達は本当に貧しくその不満が高まりつつあること。第3の点は、どんな山奥に入っても必ず日本の商品が目につき「物で日本が知られていること。第4には草の根の人々の生活が破壊されているのみならず、自然も破壊され緑が失われつつあるという点で、特に顕著なのはネパール、タイ、フィリピンであること。最後に極端な貧しさにもかかわらず、草の根の人々が「人間としての豊かさ」を確かにもっていることがわかりました。PHDは、この草の根の人々とともに、この国々に平和と健康を作るまで、息長くかわらねばならぬという決意も新たに、35日間におよぶ旅を終え、帰って参りました。(草地賢一)

PHD運動 参加者の声

ドシドシお便り下さい。

私は会社の休暇を利用しては自転車で行きます。そのたびに健康のありがたさを深く感謝し、同時に「何かをしなれば」という気持ちになるのです。もう年でもあり、安易に過すよりは、よい生き方をしたいと日ごろから考えていました。「助け合うこと」「ともに生きること」というのはそんな私の目標なのです。

私がPHD運動に協力している理由も、日本で学んだ研修生が、その手で彼の村に合った地域づくりを行なえるという、PHDならではの一番ほしい国際協力のあり方や趣旨に賛同しているからに他なりません。現在は東京に住んでいるため、研修生の皆さんに直接的なお話をするわけにはいきませんが、せめて皆さんの上京の際には案内した

り、家に招待したりさせていただきたく思っています。

私が彼らに望むことは、日本のように進歩はしても道徳の荒廃や公害問題などに悩むことがないよう、良い風習や文化を守りつつ土地に合った活動を続けてほしいということです。また私はアジアや南太平洋に限らず、世界中の人々のことも考えていきたいと思っています。(東京都国分寺市・会社員 蛭田三男さん)

PHDレター15号をちらっと見たとき、いつもとちがうと思いました。カラーページがあったり、イラストがあつたりして読みやすく、PHDの運動もわかるような気がしてきてました。中でも「ON THE WAY」が特におもしろく思いました。王様も日本人も、村人達に役立つようにと思ったのだろうけれども、村人達の本当の苦しみがわからなかったからそんなことになったのだと思います。とても残念です。これからも、いろいろな国の情報を伝えてください。(神戸市須磨区・小六 三浦由起子さん)

PHD NEWS

10月13日(回)は民際フォーラム'85

今回は世界に開かれた日本社会づくりの途をテーマに大阪YMCA会館大ホールにて、10時半より。基調講演はL. ジョスコビッツ氏。

理事会・評議員会報告

5月22日、第10回理事会が開催され①理事交代(伊藤治行氏にかわり田淵栄次氏就任)、②84年度決算報告、③評議員会答申、④85年度事業と会計報告の審議が行なわれました。5月31日には第2回評議員会が開かれ、小委員会の答申をもとに3年間にわたる人材育成基金の募集が決定されました。

1985年度 会費納入のお願い

本年度PHD会費(一口5千円)、友の会会費(5百円以上任意の額)の納入を受け付け中。前年度会費を未納の方々もお忘れなく。

基金寄託状況(会費・ご寄附)

1985年	5月	¥3,417,975	・	131	件
	6月	¥2,366,596	・	184	件
	7月	¥1,721,550	・	145	件
	計	¥7,506,121	・	460	件

ご協力ありがとうございます。上記の通り、ご報告申し上げます。

韓国スタディーツアーご案内

PHD協会では、アジアの食文化と草の根を訪ねる旅を企画し、この秋から実施します。第1回は韓国。釜山から慶州、扶余、水原、ソウルを訪ねる4泊5日の旅です。

実施 9月26日～9月30日

費用 約120,000円 参加資格 大学生以上

オリジナルトレーナー登場!! 君は歩く宣伝塔

前号で紹介のオリジナルTシャツは大好評を博し、

製作数は800を越えました。秋からは背面にPHDマークをプリントしたトレーナーを販売します。サイズはS.M.L. カラーはクリーム、オリーブ、グレー、ワインと渋めの4色、各3500円。



/編/集/後/記/

PHDレターは、事務局全スタッフと会員の主婦達の手で作られています。期日までには、必ず原稿を出してくださるさすがのK氏、30代に入って間もないのに難解な漢語を連発し、格調高い文章を書くO君、仕事をしながら聖徳太子の如く情報を聞きわけ、小気味よい記事を書くF君、大卒2年後でありながら白木のように純粋な自称ミルクボーイ(牛乳大好き)のM君。4人4様の中で、常に鳩首会談し、原稿整理に奮闘する主婦ボランティア。各人の特徴は、記事中にはっきりでていると思います。ご感想、ご批判など、皆様のお便りお待ちしております。(M.S)

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため掲載しておりません。